

## 『法然上人行状絵図』と誓阿後筆説

佛教大学非常勤講師 谷川 守 正

### (一)

2月6日の朝日新聞で国宝知恩院本（以下知本）『法然上人（1133～1212）行状絵図』48巻の五億画素デジカメの画像処理による後筆の新発見を知った。目視により、知本には多くの後筆がその文とそれに添えられた画に見られるが、それらはいつ、誰がしたか、は大遠忌記念展などを間近かに控えて、展示への参画・参加に関わる仏教教育学の緊急課題になる。これは学際的、総合的研究への参加の可否を決める試金石でもある。

48巻は知恩院に秘蔵され、良好な保存状態にあるが、浄土学関係の専門研究者にも容易に接近できない。全巻総延長五百米以上の大作であり、古体字が読みづらく、絵図の後筆に悩まされる。しかし巻頭に「おろかなる人のさとりやすく、見むものの信をすすめむがため」とあり、これは本来知恩院の教化用教材である。今回は仏教教育学の出番である。

たしかに研究対象としては取り扱いが難儀ではあるが、少し工夫して読めば、その利用法が案内される良教材である。それは卷子本であるから、教化において展開の仕方、異なる巻との組合せなど、多様な用法が可能である。それゆえに教材の視点に立てば仏教教育学ならではの、新しい発見を導き、そこに隠された道標に気付く事ができるはずである。

まず龐大な作品に加えられた多数の後筆から

研究対象を選定する必要がある。また知本には副本とされる奈良当麻寺奥院の往生院本（以下往本）があり<sup>01</sup>、ともに成立時期と後筆者は明らかでない。両本同時成立とする江戸期の『縁起』<sup>02</sup>には疑問点が多く、到底それに頼ることはできない。知本の後筆は往本では修正<sup>03</sup>されているから、後筆後の往本によって知本の成立時期の下限を知ることができる。

研究文献は、至難な知本への接近に代えて、公刊された、カラー版知本『法然上人絵伝』<sup>04</sup>（以下カラー知本）3巻、中央公論社、81年、往本および元禄16（1714）年刊義山（1647－1717）『翼賛』との校合本『大正新校法然上人行状絵図』（以下『大正新校』）6輯<sup>05</sup>、内外出版、24年、塚本善隆編『古寺巡礼、奈良7、当麻寺』（以下『カラー往本』）淡交社、79年カラー図版63（知本の「二祖対面図」右法然側の模写）と64（資料1）、小川竜彦『一枚起請文原本の研究』（以下『原本研究』）、70年図版91および126（資料2）108（資料3）を中心にする。岩波文庫『法然上人絵伝』は教養書に再編され、中井真孝『法然上人絵伝を読む』は知本の原本であり、岩波書店『大和古寺大観、第二巻、当麻寺』の図版は単色写真であるため、主な研究対象に入れない。

これらの限られた文献を駆使して後筆の時期と筆者を探ると、後筆は文よりも画に多く認められる。しかし画は文にしたがって描かれるから、まず文に後筆がなく、画に典型的な後筆が認められる巻を選び出す。また知本には各巻に

内題、目次、尾題がないが、別料紙の奥書が付く。奥書には共通して、「何巻料紙数何丁、四十八巻絵伝」、その下に「知恩院」と「常住」を並べて書く。そして第七巻（以下巻07）、それと異筆で巻09と10にそれぞれ小さな添え状<sup>06</sup>が付く。48巻の内、「知恩院常住」の「恩」を正字にするのは、巻07巻ほか2巻のみであり、他の45巻は異例に「恩」に第1画目を欠く。

そして卷子本の両本に題簽が付き、知本は「法然上人行狀絵図第一」などと表記されるが、「絵図」が「画図」になるのは16巻あり、全体の構成から前半・後半を各24巻に分けると、「画図」は8巻づつになり、配置に一定の法則性が認められる。しかし往本の題簽は大方が「形状」になる上に、「絵図」と「画図」がある。

## (二)

朝日新聞記事に載った新発見の後筆のカラー写真は、知本巻07第5図（以下図五）の善導立像下半身であるが、後筆箇所は小さく不鮮明である。その詞書に全く文の修正がないが、各絵図に数箇所が確認できる。絵図は詞書の一部分しか描けず、絵図に詞書で表わせない情景があり、両者は教化用教材として相補関係にあり、卷子本の特性を生かして文と画を自在に組み合わせ、教化指導上と自己学習上の工夫が随所に施され、詞書を読むことも、絵図によって物語を読み聞かせることも、また話し聞かせも自由にできる。

往本は知本の模写でなく、知本の後筆に見られない、最大52字の長文の省略、絵図の一部改変があり、むしろ改訂版といえる。しかし後筆に大幅な改訂は少なく、原本はあくまで尊重され、絵図の塗抹箇所の原因も見せ、詞書の修正も見せ消ちにする。しかしながら知本の巻45第1段（以下段一）「一枚起請文」本文にのみ朱書

修正があり、注目され、その見せ消ちは一字の上に縦に三本細線を書き、三字の場合はその上と下に横線で丁寧に囲むが、「愚鈍の」の右に縦の傍線がある。『大正新校』頭注は前者を「原本朱抹シアリ」とし、後者を「原本朱抹ス」とするが、後者は抹消記号でなく、当時の識字率に鑑み、「一文不知」と「愚鈍」との相違から、仏教教育学は「愚鈍の」を強調する記号と見る。

往本は、1361年に「慧光菩薩」の勅号を受け<sup>07</sup>、貞治四（1365）年に「黒谷上人起請文（一枚起請文）」と「黒谷上人御法語（二枚起請文）」の両面版木を制作した知恩院第12世<sup>08</sup>誓阿が、1370年に奈良当麻寺に往生院を創立して、知恩院からいずれも重文の往本、往本『選択集』、法然木像を移し、74年没と伝える<sup>09</sup>。

両面の版本（資料2）を重ねると、中央の行に往本『選択集』題辭を中心にする念仏の行法が読取れる工夫が施されるから、この木版も表裏が相補して、念仏行法を確定する。すなわち資料2の底本では、図版番号が示すように、起請文と御法語は所載頁が離され、サイズを異にし、さらに縦横の向きが異なるため関係づけができてくいが、奥書の日付と識語が同じであることに気付き、同じサイズにコピーし、重ね合わせて窓ガラスに当てると、御法語の中央の行に「念仏の行者（観念にととまることなかれ）思ははやがて声をいたしてとなふへきなり」の括弧内の所に、起請文の大きい目の「南無阿弥陀仏」が入って、「念仏の行は南無阿弥陀仏思ははやがて声をいたしてとなふへきなり」となり、そこに念仏の唱え方が示されるので、知恩院で版木を見ると、鋳物のように堅くて重く、数多く摺られたにも関わらず、被せ彫りがない版木の両面<sup>10</sup>に起請文と御法語があり、東京からの刷師に目の前で、版本を制作して貰い、両面を重ねると予想どおりの結果がでた。起請文の面が専ら摺られていて、御法語の面は墨の乗りが悪く、難渋したが、起請文の面の中央の行

は「南無阿弥陀仏」の「南」のカマエの中が「午」である異体字<sup>11</sup>を確認できた。

長文のみで後に図が付かない巻21末の段三は、いわば御法語の詳細な解説であり、巻45の起請文とまた同じ関係にある。それを踏まえて両面木版は貞治四（1365）年11月25日付けで制作され、そして1368年に知恩院に遷座したと光背の墨書銘<sup>12</sup>に記される、法然木像に蓮華台が後補されるが、それは巻08図八の「人々の瑞夢」の一つである室内の蓮華台に安坐する法然像をモデルにするように、往本は1360年代前半に誓阿の制作後に、貞治本版本が開板<sup>13</sup>されたと考えられる。すなわち知恩寺蔵「二枚起請文」を誓阿が修正して『黒谷上人御法語』とし、知本巻21段三の「念仏の行者の心得」に対応させた。それによって「二枚起請文」がクローズアップされて、知恩寺に安置されていた法然木像が、それを契機に知恩院に遷座され、1370年に往本、選択集とともに往生院に遷されたと考えられる。

しかし以上は何れも浄土宗関係の文献に基づくから、他宗の文献の傍証が必要である。善導像における後筆は一休狂歌「くろからん衣の裾の黄にするは善導大師はこ（糞）をたるらむ」<sup>14</sup>を想起させる。「黄」は「気」と掛詞であり、解字して中央の「田」を上に移すと「異」になり、「異」を「米」下に置くと「糞」の字になるという一休流の洒落が読み取れる。しかし出典の江戸期出版の『一休咄』は読み物教材にはなるが、裏付けの史料としては疑問符が付くので、京都西山深草派総本山誓願寺で一休自筆本の「一枚起請文」一軸を関係大学長の紹介により5月に版本の資料3と比較し、校合できた。それは貞治本「一枚起請文」を底本とし、念珠を手繰る典型的な法然像の略画が左横にある。

資料3の法然賛<sup>15</sup>に「伝聞法然活如来 安坐蓮華上品台」と台座付法然木像が詠まれ、一休は『選択集』題辞の六字名号「南無阿弥陀仏」

（ただし「南」は正字である）を中国の禅僧虚堂智愚（一休はその七世）のものとし、その法語において「此外達磨虚堂もいらぬもの唯法然はおしへを一大事と存じ奉る。我は今日より浄土宗に成り申し候」、と当時『自戒集』にも見るように印可問題に苦慮する一休は、法然の教化法を採用することを阿弥陀仏に起請する。このように誓阿が往生院に移した知恩院の寺宝4点が、すべて一休自筆本の中に読み取れることに気付く。そして法然の「一枚起請文」を「起」とし、その要点の念仏行を表わす典型的な法然像の略画を「承」とし、自作の法然賛を「転」とし、「南無阿弥陀仏 虚堂」に始まる一休法語<sup>16</sup>を「結」として、全体の構成を漢詩調に起・承・転・結にするのが、一休自身の『一枚起請文』<sup>17</sup>である。

その掛軸が収納される桐箱の蓋裏に箱書があり、誓願寺第62世光空<sup>18</sup>（その下に異筆で「看瑞上人」）が信者から両親の追善供養のために寄進を受けたとある。なお図版108の上に107が掲載されるが、書写した一枚起請文のすぐ横にも法然座像の略画が付く。しかしそれは同じ図で、それに疑問をもって、特別に原本を調査し、略画の重複と箱書の新しい貴重な知見を得ることができた。

### （三）

以上の概説によって画の後筆と文の後筆の典型的事例を具体的に巻07の画と巻45の朱書修正を中心に研究する。巻07図一に法華経8巻を並べた経机を前に合掌する法然の庵の廊下に、雲に乗る白象に安坐した普賢菩薩が来現する。その白象に座った菩薩にのみ明障子の棧が2重写しになり、その普賢菩薩座像だけは明らかに後筆であると分かる。

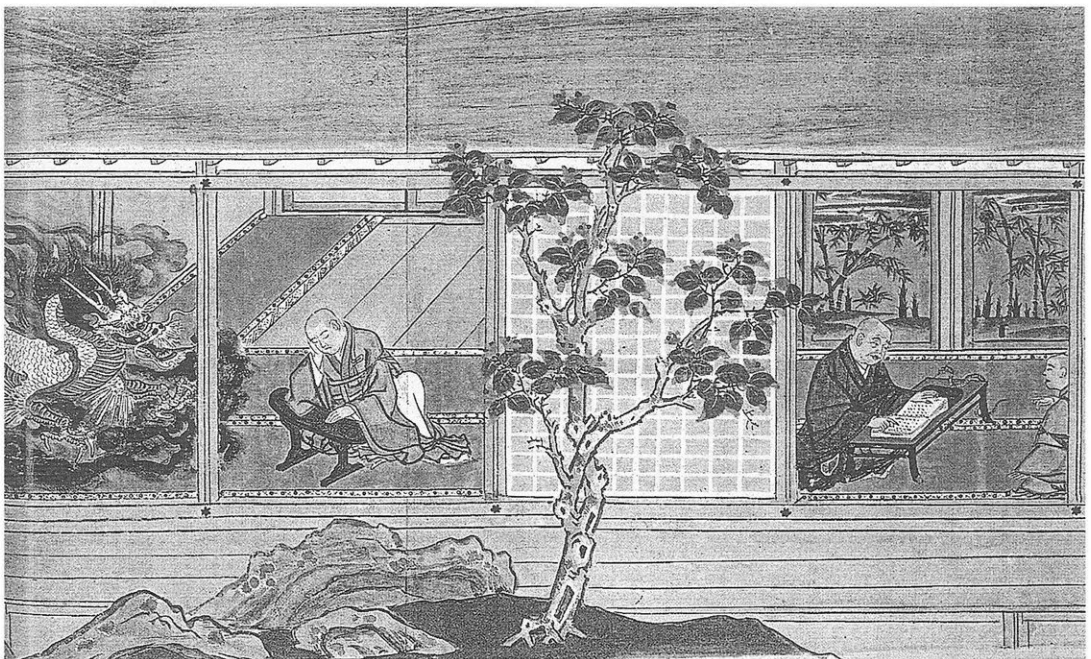
図一の法然庵室の半開きの明障子は、同じ庵

室を描く図二では開け放たれ、図一では庵室の半開きの明障子によって隠れていたが、図二では障壁画の面に描かれる竹林に飛びかう群雀がクローズアップされ、群雀を強調するため、竹林は淡い色で描かれる。しかし往本では資料2に見るとおり、濃色の竹林に群雀が見えない角度に描かれる<sup>19</sup>。往本は知本とセットになって初めて、群雀が消えたことを表わす仕掛けになる。それは法然の華嚴經の講読の声を聞いた「青雀欲喜苑に生せり」(段三)を間接的に示唆する。

華嚴經を高足信空に講ずる法然は、經机に小蛇が這い上がっても、泰然として左手で押さえた經文に指差しながら信空に語りかけているが、詞書に云うように信空は知本では蛇に怖じけづいて、驚きのあまり思わず、顔を庭の方に背けて逸らす。しかし資料1の往本の絵図では、信空はむしろ身を前に乗り出して蛇を指す。その詞書では蛇を外に出すように法然から命じられ、やっと蛇を外に捨てて戻ってみると、元の

位置の經机の上に蛇がいて、法然から再度捨てるよう促されて、「しかじかと答」えると、法然は黙る。その答弁は詞書に具体的には書かれていないが、中国の故事の日時と場所を明記して、「蓮華池より毎日青衣なる二人の童子(二匹の蛇の化身であり、法華經の守護神の竜に通じる)」(段二後半)が出てきて、華嚴經の訳業の世話をして、池底に戻ると語る。また昔華嚴經が竜宮にあり、竜樹菩薩が竜宮から持ち帰って、人間界に広めたとの伝説的故事を置く。なおその青蛇は図三では法然の説法を聴講して、結願の日に往生して、蝶や天人等になったとの人々の証言が描かれる。

それらの故事が絵図に直接結びつかないで知本の異時同画面の左図では信空が右足を投出し、袈裟をずり落として眠る夢枕に、詞書では大竜が出現して、自分は華嚴經を守護する竜神だから蛇を恐れるな、と告げると目覚めたとある。往本の信空の「しかじかと」の答は、それらの故事を心得た答に変わる。法然はそれをよ



(資料1) 64 法然上人行狀絵巻 奥院

しとして、口を閉ざした。

そして信空は往本では、6帖の板敷きの上に畳4帖を敷いた隣室に、脇息に凭れて左足を立て膝にして、仮眠するように夢見るが、知本の信空のような醜態を曝さない。しかし知本の信空は畳を敷き詰めた同じ部屋で疲れ切って、眠りこけるように見える。信空は法然の師の叡空と同門であり、その後に法然に師事した一番弟子であり、元久元(1204)年の『七ヵ条制戒』の署名順は法然花押の次であり、建暦二(1212)年に建暦本の『選択本願念仏集』を刊行したと伝えられる。

しかしながら両本の相補関係の妙もある。知本だけでは、中井が云う通り華嚴経と竜樹との神話的關係以下の中国の一連の故事の記述は、画と比較すれば特別な意味を帯びず、「饒舌というべきか。」<sup>20</sup>と疑問に思う。そればかりでなく、「しかじか」の答えの内容は中井の推測の域を出ず、ひいては信空の品格を低く評価することになる。そして群雀が強調される図柄も過剰表現になり、また竜の出現は故事との関係が薄く、ただ守護神を名乗って安心させるだけで、何の為の大仰な左図であるかが分かりづらい。

しかしそれに往本を重ね合わせると、積極的評価に変わり、知本の原本を修正によって補いながら、さらに文の意味を一層分かりやすくするとともに、知本の足らない所を補い、また逆に知本によってより豊かで深い意味が与えられる。

往本では青雀が画面から消えたことは、知本の強調された群雀の図柄なしには表現する手立てではない。元々蛇が嫌いな信空の態度の転換も知本の構図を前提にし、文後半の二人の「青衣なる童子が蓮華池」から毎日現れることを表現するには異時同画面が必要であるが、すでに左図に使用しているから、二匹の蛇の出現を表わすために、最初の蛇に驚く知本の信空と二匹目の蛇の出現に前向きになる往本の信空の二枚の図柄が必要になる。二匹の蛇が順に出現したと

すれば説明がつく。また中国の故事の意味を生かすことができる。

そしてその間の法然の姿勢は両本に同じであり、経机の上の子蛇を再び外に出せと云う法然は当然中国の故事に精通しているが、知本の最初の蛇の出現に驚いて顔を背ける弟子に講話を続けることは困難と判断して、最初の命令を出し、二匹目もそう命じるのは弟子の心を落ち着かせ、華嚴経の講義に集中させるためである。文の「しかじかの答え」が弁明になることも承知の上であり、左図の竜の出現による安心を洞察する。しかし往本の弟子の前向きな姿勢から「しかじかの答」は故事を引いたことを確かめたと見えて、法然は口を閉ざす。知本では浮き足立つ信空が、次の段階の往本の信空は意識と態度を変える。このように巧妙に両本は相補関係にあって、生かし合い、高め合う工夫が講じられる。

#### (四)

次に文の比較について知本の修正箇所は字の挿入あるいは字消しそしてその上の上書きに留め、往本に意味を分かりやすくするための長文の省略があるのが特徴といえる。しかし原本を尊重して、原本上の加筆修正はない。文についても両本は相補関係にある。

それ故に誓阿の独創的な貞治四(1365)年の両面版本(資料2)の表裏一体化による知恩院の念仏の行法は、国宝の草本『選択集』(1198年)第3章私釈の「声念是一」を「念声是一」と入換えて書写した往本『選択集』(1204年)の念仏行を表現する。「声念是一」は『黒谷上人起請文』の底本である黒谷本『一枚起請文』に、「念声是一」は『黒谷上人御法語』の「念仏の行者観念にとどまる事なかれ思はばやがて声をいだしととなふへきなり」の「念声是一」の底本、知

語注新人与谷黑

[illegible]

九一 貞治版本 版本新褶 総本山 知恩院蔵

黑谷上人起請文

[illegible]

貞治四年己未十一月十五日開板安置知恩院以傳迦代云

(資料2)

恩寺本「二枚起請文」(1212年)に示される。教化に関しては黒谷本「一枚起請文」よりも、知恩寺本「二枚起請文」が重視される。

たしかに知本の後筆前の「一枚起請文」は黒谷本の「口ハーかうに念仏すへし」に配慮して、他本の大方が「ただ一向に念仏すべし」と書写するのに対して、「一向に念仏すべし」として、「口ハ」を省略する。しかし朱書修正はそこに「た」を挿入する。

しかしながら誓阿は両者を、巧妙に知本の巻

21の「念仏の行者の心得」に詳述する知恩寺本『二枚起請文』を生かして、一体化しながら、黒谷本のキーワードである「南無阿弥陀仏」の「南」を往本『選択集』の内題字のそれと同じように異体字にして、知恩寺本の念仏の行法に取り入れ、それによって黒谷本よりもむしろ知恩寺本を主にし、両面版本を知恩院に永久保存するよう奥書して、永久保存の知本とともに常置する。すなわち誓阿の教化において声念か念声かよりも、一が大事である。本質は本願の

念仏である。ただ教化法として念声一を選択する。それは『選択集』法然自筆の内題の下が、兼実への念仏為先か、親鸞への念仏為本かの選択でなく、相手に応じた「為先」と「為本」であり、両者に異なるのは当然である。口称念仏か称名念仏かの選択についても本願の念仏こそが大事である。要するに法然は教化において相手の機に応じて、その個性と能力を生涯にわたって伸長させるように、創意工夫を懲らすところに法然の創造的教化の独壇場がある。

巻07は二分され、図一は法然修行の、図二は信空教化の、図三は女人教化の証であり、巻07前半に法然教化が体系的に証される。巻07後半の図四は図一に対応し、合掌念仏する法然の前に同じく瑞雲に乗った宝具が来臨するが、図一がその伏線になり、分かり易くなる。その他にもいくつかの伏線があり、読者の理解を助ける。図五の二祖対面図の法然の襟元は知本では塗抹され、川の波の模様を法然の周辺だけ色を濃くして塗抹の跡を見えにくくする。それに対して往本には図版63のとおり法然の僧綱襟は見られない。同じように巻07の法然と信空の僧綱襟は可及的に塗抹される。それは他の巻についても一貫する。

しかしながら書簡の使僧が返事を書く法然の前に居ず、軒下に供僧だけが待機する巻22図一の畳の上に後筆で使僧を描き加えたために、畳の縁の線が使僧の胴体を貫通する絵図や念仏において法然が典型的に両手で手繰る念珠を塗抹して、詞書に忠実に手に料紙を掲げる後筆の法然の姿に違和感は免れない。その他にも図の後筆に苦心の跡が伺える。

## (五)

知本に先行する法然伝の一つ『一期物語』に源智が弟子に語ったように、法然は宗教的回心

を遂げた教義の新しい教化の在り方に苦慮し、善導との夢中間答を契機として自身の化道が善導の印可を得たと自証し、称名念仏の教化を基礎付けて、宗教的回心に裏付けられた教育的回心を遂げたと語る。ここでも瑞相の証として画工乗台に描かせた善導像が、後に唐朝から渡来した肖像画<sup>21</sup>と一致したと、身近な資料を援用して瑞相を証する。しかし知本巻06段八に詳細に上人が入宋する重源に命じて、浄土五祖像を将来させた旨が述べられ、図八に障子の前にその画像が掛けられるが、斜め上からの視点で描かれて、雰囲気しか伝わらない。それが巻07に続く善導像とその由来ははっきりと見られる。

それに裏付けられて、本来宗教的体験の極致である三昧発得の瑞相体験図六を、画工に描かせる時、極楽世界を象徴する平等院鳳凰堂を取り上げてその具体的な証とする。巻07後半の3図は法然の教化の転換を表わし、図五は善導による法然の教育的回心<sup>22</sup>となる。

## (六)

往本、往本『選択集』、法然木像と出会った一休は、自筆本「一枚起請文」一軸に見るように、「一枚起請文」の書写において「観念の念にも非ス」と、ここにおいてのみ小字のカタカナの「ス」を用い、黒谷本「一枚起請文」の但書を除く、八つの文尾が「ス、ス、す、し」と「テ、テ、て、し」になる漢詩調を鋭く洞察し、一休書写本の八文末「念にも非ス」、「念仏にも非す」、「別の仔細候はす」、「本願にもれ候へし」の文尾が「ス、す、す、し」になる前半は、教義であり、「愚鈍の身になして」、「無智の輩に同して」、「知者のふるまひをせすして」、「念仏すへし」の文尾の「て、て、て、し」の後半は教化であることを見抜く。そして前半の教義と後半の教化は「念仏すへし」に収斂する。

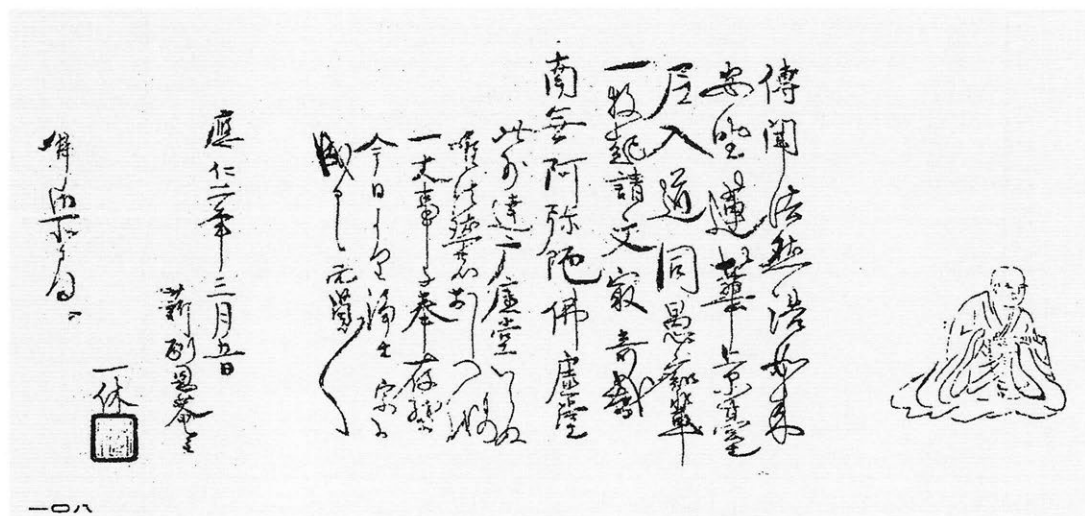


しかし黒谷本の独特な用字が口述筆記における法然の声を記録した五段階強弱表記と息継ぎ箇所<sup>23</sup>であり、かなとカナの転換するところが、句読点に当たること、そして「念仏を信せん人」とは、念仏を信じようとする人を意味するよりは、この文脈からすれば、むしろ相手に念仏を自ずから信じるように促す人、すなわち主体的念仏の自己教育的指導者を意味すること、そして後半の念仏指導要領を法然自筆の花押の運筆が実践的に表現し、それを現場に居合わせた源智が見て、それを源智の「添え状」の同じ趣旨の自身の花押に表わしたことを<sup>24</sup>勿論黒谷本を見ない一休は、知らないものの、後半が法然の教化法であることを、一休法語の「唯法然はおしへを一大事と存じ奉り候」の文中に窺める。

一休は両手で念珠を手繰りながら専修念仏する法然像の典型的な特徴を「一枚起請文」に書き添えられた略図に法然像の本質を表わし、法然賛文に「伝聞法然活如来 安坐蓮華上品台」の第一句と第二句に蓮華台付法然木像<sup>25</sup>を詠み込み、念仏の化道は一を普遍的な「南無阿弥陀仏 虚堂」の文に統合し、そして「唯法然は教えを一大事」とし、教化において「今日より浄

土宗になり申し候」と、法然の教義にでなく、誓阿を通して法然の教化法に依ることを起請する。したがって一休は誓阿に至る教化の歴史的証人になる。

それによって一休は『自戒集』<sup>26</sup>の印可拒否問題から脱却し、その末尾の自署「禅僧法華宗<sup>27</sup>たちの純阿」、花押、落款から、「薪酬恩庵主一休、落款」(資料3)となり、この「起請文」によって教育的回心を遂げる。『自戒集』の一休の序文に添えられた三行に渉る長い異例の署名「前徳禅寺塔主虚堂七世むかしは純一休いまは禅僧法華宗たちの純阿弥」は、『一休墨跡』<sup>28</sup>では花押の留め点がその上の落款と重なる位置に書かれるが、影印本ではその最後の点は書かれず、また『一休墨跡』のその他の落款とは異なるために、改めて影印本の落款を観察すると、一休の高足で、『一休和尚年譜』<sup>29</sup>の執筆者「墨斎」<sup>30</sup>の篆刻字であることが解読でき、3行の署名は弟子の代筆と分かる。その趣旨を察した一休は、自筆本「一枚起請文」に、「薪(現京田辺市内)酬恩庵主一休」と自署し、むかしの修行時代の「一休」<sup>31</sup>に戻って、教化の再出発を誓う。



(資料3) 一休本 版本新襖 京都 誓願寺蔵



したがって一休の教化法の転換は、誓阿の間接的教化を契機とするものであり、その後の一休禅の教化は、「南」の異体字の遺偈「須弥南畔 誰会我禅 虚堂来也 不直半銭」に象徴される。柳田聖山他の先行研究は「須弥南畔」をこの世界と理解するが、「南」は異体字であり、地名でなく、人名の「南浦」すなわち中国留学僧で虚堂に学び、大徳寺の開山を初め、勝れた弟子を育て、臨済宗の興隆に功績のある大応国師である<sup>32</sup>。弟子に与えた副本（落款がない。）は現在真珠庵にあり、最初「須弥畔」と書かれ、右傍に小字の「南」を挿入<sup>33</sup>し、原本の異体字に注目させ、その特別な意味を弟子に暗示する。

### (七)

以上要するに知本の後筆は、巻07図二についての往本との比較検討、巻21段三の「二枚起請文」の趣旨と巻45の「一枚起請文」との比較に基づく誓阿の貞治本両面版木の工夫等との関連で、誓阿説を導き出すことができると考える。したがってこのように後筆を補完する往本は、誓阿の教化の業績を評価した勅号賜与の1361年から貞治本両面奥書の日付の1365年までの成立であり、知本の後筆者の有力候補は、1350年代から70年まで知恩院第12世の地位にあり、61年の百五十回忌に勅号を受けて公的に評価され、65年に知本巻21に巻45の朱書後筆を巧みに組合せた貞治本版木を作り、その際知恩寺本を巻21に即し大幅に加除し、知恩院の教化法を確定し、それを契機に68年に知恩寺から法然木像が遷座され、後に巻08図八に基づいて木像に蓮華台座を後補し、70年に往本など知恩院の寺宝を往生院に移し、公開して、教化の視聴覚教材にし、そして1468年3月5日発給の一休自筆本『一枚起請文』に示すように、印可拒否一休の教育的回心を導いた、誓阿その人と考えてよい。

### (八)

しかしながら知本に誓阿の筆でない重要な後筆がいくつかあり、さらに検討を要する。それを明らかにするためには、手掛りが不可欠である。従来見過ごされてきた知本の添え状と題籤がそれである。3通の添え状は巻07と巻09と10の奥書に付く。軸装の題籤は三分の二が「法然上人行状絵図」、特に巻01～巻08は「絵図」であり、三分の一は異字の「法然上人行状画図」となる。なぜそのように異字を用いるのか、小松茂美<sup>34</sup>はそれを48願に関連づけようとするが、行き詰まる。しかし仏教教育学は、教育の現場において教師は生徒の行き詰まりを大事にし、それを生徒自ら乗り越えるよう促すように、むしろ小松の挫折から仏教教育の研究を始める。

なぜ小松は行き詰まるのか。小松は48巻を48願に、「画図」の16巻を16門などに関連付けるが、その前提となる48願との関係を疑うのが仏教教育哲学である。48願に関連づけても良いが、それでは重要な第18願を用いる余地がない。もし48巻を「絵図」の32巻と「画図」の16巻に分けて、聖覚の『十六門記』を持ち出すなどしても、32巻の説明に窮する。

上述のように巻07は前半の3つと後半の3つとは対称的である。また「一枚起請文」の巻45と「二枚起請文」の巻21は対になる。そして両者の位置を分かりやすくするために、48巻を2分し、24巻づつにすると、説明できる。前半と後半の21番目に両者が位置づく。

48願中の第18願は王本願である。『選択集』第3章で偏依善導一師の法然は善導釈にしたがって、大経の第18願を引用するとき、その原文から末尾の「唯除五逆十惡誹謗正法」を省いた48字文の善導の引用文に、善導の『往生礼賛』の釈文を添える。正和版の法然影像の銘文<sup>35</sup>はこの48字である。『教行信証』後序でも法然は親鸞が書写した影像にその48字を親鸞に書か

せ、その文中の「世」の字に削除記号を付け、47字にするが、親鸞は生涯それを「真文」として、「若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚彼仏今現在世成仏当知本誓重願不虛衆生称念必得往生」の「世」を脱字<sup>36</sup>にして、引用する。その48字文は前半の24字と後半の24字に分けられる。なお「世」の脱字は、法然が善導にしたがって大經の第18願を引用するとき、まず末尾の10字を省略したように、親鸞に対しては『往生礼賛』の善導釈を口述筆記させて、法然自らが脱字記号を入れる。

親鸞は晩年の『尊号真像銘文』(広本)の冒頭に第18願文を引くとき、「唯除五逆十惡誹謗正法」迄を書くが、最初「正」を抜いて、後で朱筆で「正」を挿入し、補う。それは親鸞の意図的脱字である。また「法」を古体字に作る。そこに親鸞から弟子顕智への問題提起によって、その正しい解釈を促す教育的配慮がそこに窺える。

親鸞の『選択集』書写本に、法然が「念仏為本」文を書かせたのを受けて、親鸞は法然の影像を申し預かって、描いた法然図像に法然が口述した48字文を賛にして、法然によって「世」を脱字にされた坂東本『教行信証』後序の48字の前半は「若我成仏」で始まり、仏の視点に立つのに対して、「彼仏」に始まる後半の24字文は人の視点に転ずる。このように48字の善導釈文は24字文に二分され、対称的である。

知本の編者はこの二分法に従ったと考えれば、善導が第18願釈において、大經の第48願文から末尾の10字を省略して48字を2分して前・後半24字に分け、そして正和版法然影像の賛文のように、全体の48字を8字6行にすると、前・後半の3行が対称的になる。

それを背景にして48巻を見直すと、前半24巻の最初の連続する「絵図」の8巻に続く16巻は「絵図」と「画図」が8巻づつになり、添え状の巻09の「画図」と10巻「絵図」の組合せに従

えば、奇数番が「画図」に、偶数番が「絵図」になり、両者の組合せが続く。巻09の添え状「南無阿弥陀仏 為両親義山往生」と巻10の添え状「南無阿弥陀仏為伝栄往生」が同筆で、その組合せは巻07の3人戒名の内最初のは両親と認められ、3人目の戒名はそれに続く男性の生前戒名並びに俗名と夫婦関係になるのと対になる。そのことに気付けば、それと対になる異筆の巻09と巻10の添え状は道標となる。

異筆の添え状はしたがって義山が用意した道標であろう。それは巻09からの16巻が奇数番目の次の偶数番目を対にするよう案内する。では後半の24巻はどうか。「画図」の分布状況を見れば、前半のように「画図」の両隣は「絵図」である。「絵図」が2つ続く場合もある。しかしここでも奇数番目と偶数番目の組合せを目印にして、「画図」と「絵図」の異字のもつ意味を教化における指標として読み解くことができるであろう。

仏教教育学がこのように添え状の謎解きをするのは、48巻から必要な巻を教材に選び出すためである。仏教教育学は現場の実践において、異字と添え状の組合せから、選択の目印を認識する。勿論その他の解釈もあるかもしれないが、それはこの道標として教材の利便性を図るためには、有効な解釈ではないだろうか。

題簽の異字は義山の添え状の支援を受けて、その法則性が仏教教育学の視点に立てば、そこから見出し出されるが、それだけではない。知本の成立時期の特定にそれが役立つ。義山の添え状はその重要な伏線になる。

## (九)

国文学は巻30の法然和歌の一首を手がかりにする。法然没後百年にあたる1312年の『勅撰玉葉和歌集』に入集する「勝尾寺にて」と題する

「しばのとにあけくれかかるしらくもをいつむらさきの色にみなさむ」の和歌の脚注に「此歌入玉葉集」とする。『玉葉集』の現存資料が1320年の刊行であるから、知本の成立は1320年以降とする<sup>37</sup>。しかし勅撰和歌集に入集する法然和歌は他に2首あり、1つは浄土宗の宗歌となる「月かげのいたらぬさとはなけれどもながむる人のところにぞすむ」であり、1320年の『続千載集』に入り、もう1つは1359年の『新千載集』に入る「むまれてはまづおもひ出んふるさとにちぎりしものふかきまことを」である。「此歌入玉葉集」と「此歌入続千載集」は本文と同筆であるが、「此歌入新千載集」は「此歌入続千載集」とは異筆である。

『続千載集』では「月影」のすぐ後に弟子の宇都宮蓮生法師の「下品下生といへる心を」と題する釈教歌が続く。それは法然の「月影」の1種の返歌であり、そして「月影」のすぐ前は、藤原定家の長男で蓮生法師の娘婿の為家の「水想観」と題する和歌が「月影」を先導する。それ故にこの選者の編集上の配慮から「月影」の入集は確かである。

問題はもう一つの異筆の脚注<sup>38</sup>がある、『新千載集』の「むまれては」の和歌の方にある。「しばの戸」と「月影」は同じ和歌集において、弟子蓮生の和歌に先行するが、『新千載集』の1359年は蓮生没後百年にあたり、逆に「むまれては」の和歌に弟子の和歌が先行する。「むまれては」の法然和歌は弟子の蓮生和歌の返歌の形になる。

『新千載集』の1359年は知恩院第12世誓阿の在住期間に当たる。しかしこの脚注は『大正新校』の頭注によれば、往本にない。すなわち『新千載集』の「むまれては」の和歌の異体字の脚注は往本の筆者の誓阿の後筆でないことになる。

では誰が脚注を後筆したのか。知本の編者と和歌との関係を探ると、編者の師知恩院第八世如空は井川<sup>39</sup>によれば、「来迎の粧をおもひて

よみ侍りける」が『続千載集』に、「題しらず」が『新千載集』に入集する歌人でもある。それ故に知本の編者は『玉葉集』と『続千載集』に本文と同筆で脚注することは当然の帰結である。そして如空は知恩院の三世から七世まで格別の行実が明らかでない中で、その業績を評価されて、後醍醐天皇から如一国師の勅号を授かる。如空は伏見、後伏見天皇などの帰依を受け、法皇に『三部経』と『善導大師五部九卷』を講ずる学僧としての背景に、当然法然関係の文献の収集、検討とともに直弟たちの伝記などの涉獵が予想される。

弟子としてそれに関与した編者は知本の序に云うように、ともに『黒谷上人語灯録』を初め、文献を比較検討し、選択するとともに、『玉葉集』と『続千載集』の法然和歌<sup>40</sup>を知る立場にある。それが知本の2首の脚注の背景であると考えられる。

義山はその業績から判断して、『大正新校』の頭注によれば翼本において知本の厳密な修正を数多く加えているから、『新千載集』の法然和歌の脚注を後筆する可能性は高い。

勅撰和歌集の法然釈教歌は他に2首あり、「いけのみづ人のところににたりけりにごりすむことさだめなければ」と「われはただ仏にいつかあふひぐさこころのつまにかけむ日もなき」がそれである。しかし知本に入集の脚注はない。「いけのみづ」の和歌は『黒谷上人語灯録』に載る。「われはただ」はそれにはないが、知本では「夏」と題して出る。

勅撰和歌集では「いけのみづ」は「わが心」となり、意味が逆転する。「濁り済むこと限らない」のは人の心でなく、法然の心であり、両者の法然像は対立する。そして「われはただ仏にいつかあふひくさ」は葵と会う日が掛詞になり、「こころのつま」は心の端と妻とが掛詞になると、一方ではプラトニック・ラブに理解されるのを嫌ってか、葵草の方の意味を強調する

ために、知本では「夏」を歌題にし、釈教歌の性格を封印する。

## (十)

最後の後筆問題は知本の『七カ条制戒』の弟子達の署名についてである。知本の巻48末文八に高足3人を「門弟の烈(ママ)にのせない」とする。『大正新校』、カラー版知本の詞書・釈文、岩波文庫版は「烈」を「列」と読む。『大正新校』の頭注に「往本烈ニ作ル」とあり、『翼本』は「烈」としないから、「列」と見るのであろう。しかしながら知本では、「列」の字の下に「レッカ」の横棒が引かれるから、「烈」としか読めない。そして往本も「烈」であり、『翼本』のみは「列」となる。

しかし知本には他に「烈」の用例が3つ認められる。巻14文一に「則参堂して一宗に烈し」と「十二禅衆に烈し」と、巻20文二に「僧衆あまた烈座して」がそれである。『大正新校』はこれらの知本の「烈」を頭注では「翼本列ニ作ル」とするから、知本と往本では「烈」と読み、翼本は「列」に読替える。カラー版知本の図版は「烈」としか読めない。

そのカラー版知本の『詞書釈文』の『詞書』では三つの用例を「烈」とし、『釈文』では「烈→列」とする。岩波文庫版はそれらを「列」とし、脚注では「原文は「烈」」とする。しかし巻48末の「列」にそのような脚注を付けていない。勿論知本には「レッカ」の付かない「列」の用例はある。すなわち「烈」と「列」はあくまで別である。

何故『大正新校』は知本巻48末の「烈」から「レッカ」を外して、「列」とし、頭注では往本は「烈」とするのか。また何故カラー版知本に原文の写真を載せながら、あえて原文の「烈」を「列」と読むのか。それが古筆学専攻の神崎

編だけにその理解に苦しむ。

「烈」と「列」では意味上の違いは無視できない。「烈」の用例の文脈からそれは明らかである。特に知本巻48末の「烈」の読み替えは看過できない。往本の編者は知本を尊重し、知本の「烈」を「烈」と読んで、そう書く。それ故問題は翼本の書き替えにある。

その背景を探ると幸西と行空は親鸞とともに『選択集』の書写者であり、3人の名は知本の『七カ条制戒』の弟子達の署名に載るが、原本の「綽空」は消されて薄くなった跡があり、糸へんが薄く残るが傍の上に濃く「卓」か「単」か紛らわしい傍が上書される。そして『大正新校』の頭注に「往本禅空ニ作ル」とする。これは極めて珍しい後筆である。知本の後筆を旁にだけ上書にする例は、他にない。後筆者は明らかに誓阿である。

おそらく知本も往本も教義書でなく、教化書とするために別義に関わる弟子をそこに載せなかったのであろう。直弟達の法然伝関連は重視されるが、教義との混同を避ける。教義と教化を一つにする法然を語るとき、教化において教義が混同することは誤解を生む。

如空も誓阿も勅号が語るように、教化に業績があるが、教義の新説は伝わらない。両者の教化に対する評価は、知本の添え状にも裏付けられ、明らかである。すなわち仏教教育学が両本を比較研究の対象にする所以である。

## 【注】

- 01 現在一部は京都・奈良国立博物館にあり、奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターに往本の一部のカラー・モノクロ原板があり、研究に利用できる。
- 02 忍激(1645-1711)『勅修吉水円光大師御伝縁起』
- 03 文の後筆は朱書修正箇所を除いて、字の挿入と極一部に字消しがあるが、画の後筆は原図の跡が見えるように塗抹する。大幅な削除を含め字

- の修正は往本においてするが、画の一部改変も往本にある。このように両本が密接に関係する。
- 04 編集小松茂美の解説と神崎充晴編の詞書釈文は文と画の見方を助ける。
- 05 第6輯は往本の異図48葉を載せるが、半世紀を経て単色写真が不鮮明である。
- 06 「南無阿弥陀仏為両親義山和尚往生也」と「南無阿弥陀仏為伝榮往生」は同筆である。
- 07 「知恩院蔵『旧記採要録』に「第一二世誓阿上人住持之時康安元（1361）年勅して慧光菩薩之諡号を賜う。」井川『法然上人絵伝の研究』、内外出版、1961（以下61）145頁。
- 08 「七世迄の事績は不詳」井川、前掲書、p134、であるが、八・九世のそれは傑出する。
- 09 「大和当麻奥院には『奥之院縁起』があり、それには、奥之院に安置せる大師の真影は元知恩院に崇め在りしを応安三（1370）年の春（中略）誓阿上人当院を開基して勅修御伝副本と俱に納め奉る、と移管のことを伝えている。」井川、前掲書、p146。しかし井川は「確証が奥之院縁起以外にない」同頁が、必ずしもそうとは云えないことを後述する。
- 10 その実証作業のために数人の善意の研究協力を頂いた。多謝。
- 11 往本『選択集』の内題、題辞、割書のそれぞれの文頭は異体字である。拙稿「生涯教育学序説—往生院本選択集における師資相承—」仏教大学教育学部論集第八号、98年参照。
- 12 先行研究は「遷座当寺」（『日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（図解）』、奈良国立文化財研究所、史料第十冊、76年、p.140）の「当寺」を「奥院」とあるとするが、奥院の創建はその2年後であり、「当寺」とは当麻寺でなく、知恩院のことである。
- 13 知本の序「万代の明鑑にそなふ」および奥書「知恩院常住」と同じ趣旨の奥書「開板安置知恩院以伝遷代」があり、知恩院に永久保存されるが、あくまで教化のためである。
- 14 「一休咄」、仏教文庫、31年、東方書院『絵入一休笑話集』所収、p.30、また有朋堂文庫『一休咄』32年、p.413
- 15 『狂雲集』には「賛法然上人」と題して、「法然伝聞活如来 安坐蓮華上品台 教智者如尼入道一枚起請最奇哉」と、転句に「一枚起請文」の教化の要点を詠む。
- 16 法語の「我は今日より浄土宗に成り申し候」を『自戒集』序の「念仏宗トナル其ノ煩狂雲集ニアリ」と酬恩庵本『狂雲集』頃の承句「更衣浄土一宗僧」と関連づけた転宗論を柳田聖山は『日本の禅語録第十二巻一休』、講談社、78年、p.28において強く否定するが、教化と救済のことであり、『自戒集』の「念仏宗トナル」と「作法華宗旨趣」は印可拒否を、『狂雲集』の「更衣浄土一宗僧」は同書餓死三首の世相を背景とする。
- 17 資料3の図版の上に置かれる『原本研究』図版107の「一枚起請文」の横にある法然略画は重複して摺られている。軸本は一枚の書である。誓願寺蔵の版本は、表紙、法然一枚起請文と法然略画、そして法然賛と一休法語の3枚になる。近年軸本の写真版が出た。
- 18 『西山深草史』改訂版、80年、p.78によれば、元禄十四（1701）年から13年間に在世
- 19 ただし往本の資料1は図二の部分であり、その左右の部分はカットされる。
- 20 中井、前掲書、p.54。しかしながらこれは読者への問題提起と教化になる。
- 21 京都市二尊院蔵、南宋時代、国宝浄土五祖像、『浄土教の世界—苦悩の精神史—』1992年、滋賀県立琵琶湖文化館、『図録』所収、カラー図版34の前列左側の座像は確かに、顔立ち、体型が「二祖対面図」によく似ている。
- 22 拙著『『歎異抄』蓮如本における教育的回心の生涯教育的意義』、『仏教大学教育学部論集』第8号、98年、ならびに「黒谷本『一枚起請文』花押の仏教教育的意味」、『日本仏教教育学研究』第12号、04年、参照。
- 23 拙稿「法然と源智の対話的師資相承における死生観の教育哲学的研究」、94年、『仏教大学総合研究所紀要』創刊号。一日7万遍の専修念仏を立証するように息継ぎ箇所間は臨終にしては、驚くほど長い。
- 24 拙稿前掲「黒谷本『一枚起請文』の花押の仏教教育的意味」
- 25 前掲『修理記録Ⅱ（図解）』p.138,139（僧綱襟が見える背面図解）
- 26 影印本『自戒集 瞎驢常住』、2色刷、一休寺、89年
- 27 「作法華宗旨趣」前掲書にその謂れを記して、「法華宗純一—一覽了也、落款」とする。28『一休和尚全集』別巻、春秋社、97年、p.43の写真では、写真家はその花押の留め点を加筆修整するが、編著者の寺山旦中はその脚注に「やや求心力に欠ける」p.45として、婉曲に疑問を呈する。しかし落款の解説がなければ、それに気付かれないであろう。

- 29 『一休和尚年譜』 2 卷、東洋文庫642、平凡社、98年
- 30 大徳寺真珠庵を開いた没倫紹等のこと。
- 31 昨夏一休寺に一休の師、華雙筆の「一休」の字のみを大書する掛軸の展示を見た。
- 32 日本仏教教育学会昨年度研究発表「一休遺偈の教育」、『日本仏教教育学研究』第16号、08年所収、参照。
- 33 『一休墨跡』 p.99。柳田聖山『一休 —「狂雲集」の世界』 人文書院、80年、p.236も。
- 34 カラー知本の解説
- 35 知恩院において専門の刷師にその版木を摺って貰った。
- 36 拙稿「親鸞の選択集『書写の教育』、『日本仏教教育学研究』第16号、08年、参照。
- 37 岩波文庫『法然上人絵伝』(下) 大橋俊雄解説、p.293～4、参照。
- 38 知本では『新千載集』の筆法は、「月影」の『続千載集』の筆法に比較しやすいが、明らかに異筆である。
- 39 井川、前掲書、p.135
- 40 『黒谷上人語灯録』に10首載る。その内九首は「御歌」としてその最終巻の末尾に付録の形で載るが、歌題も脚注もなく、三十一文字のみである。